

# マーク・トウェイン文学にみるプロヴィデンス

朝 日 由紀子

マーク・トウェインの文学作品を通して、マーク・トウェインの思想を捉えようとする際、鍵となる言葉は、「プロヴィデンス（神の摂理・神意）」であると見て、マーク・トウェイン文学の嚆矢となった作品における最初の用例から始まり、初期、中期、後期の主要な作品におけるそれぞれの用例を検討していき、新たな作品解釈を試みていく。最初に、アメリカにおけるプロヴィデンス観の時代的変遷を眺め、マーク・トウェインの時代のプロヴィデンス観へのアプローチとし、それに対するマーク・トウェインの考えに言及する。

## I.

19世紀後半のアメリカの小説家は、神の「義、威厳、全的主権」といった厳粛な聖性よりも、神の愛を強調した、と Elmer F. Suderman は述べている。「これらの小説家の神は、ジョナサン・エドワーズの神ではない、……人間を優しく眺め、魂に平安を与え、さらに、人間が必要とする精神的、肉体的なすべてのものを備えてくれる神を描いているのである。」すなわち、「あらゆる種類の良い物でたくさんのストッキングをいっぱいにするためにやってくるサンタクロースである。」<sup>1</sup>という面白い表現でその

---

1 Elmer F. Suderman “Popular American Fiction (1870-1900) Looks at the Attributes of God.” *Journal of Popular Culture* 4:2 (Fall, 1970), 390.

内容を端的に説明している。Suderman のいうアメリカの小説家とは、とくに当時の一般大衆の絶大な支持をうけた人気作家を指している。サンタクローズ論の直前では、Elizabeth Stuart Phelps の *The Gates Ajar* を取り上げ、その作品に登場するユニフレッドの「神は人間を仕合せにするために存在する」という発言に注目する。「天国観」に関する拙論<sup>2</sup>において、1868年に出版されたその作品は、「心を慰める小説として、19世紀で最も読者の支持を得た」ものであることに触れたが、当時の読者の精神的欲求が何であったかを知ることのできるレファレンスであるともいえる。Suderman は、こうした小説の登場人物たちの祈りに関して、「神意を見出すことに関心があるのではなく、健康、成功、幸福をリクエストすることに関心がある」<sup>3</sup>と指摘する。このような特徴的な傾向を分析した後、マーク・トウェインが、「神の属性に、人間のニーズに特別の関心を抱き、注意を払う、といった面が含まれていると感じている人々に対して、激しい非難を浴びせた」ことに言及する。また、マーク・トウェインは、人気を博したほとんどの小説家たちが無視するか、または、ないがしろにした問題を摘出し、優しい神という一般の表面的な見方に相反する、現実の世界で直面する神の非情さという厳然たる事実を指摘した、と評価する。しかしながら、Suderman によれば、大衆小説家たちは、当時の時代風潮のなかで、あくまでプロヴィデンスの慈恵に対する強い信念を強化していく方向をとったのである。

ここで指摘されているような時代風潮が、「ジョナサン・エドワーズの神」に対する反動から生まれたことは確かであろう。“Sinners in the Hands of an Angry God” (1741年) は、エドワーズの代表的な説教とされ、

---

2 「マーク・トウェインの天国建設の旅」『白百合女子大学研究紀要』第44号 68-71.

3 Suderman. *Ibid.*

「大覚醒」と呼ばれる信仰復興が起こったほどの影響力をもった。そこに描き出される地獄のすさまじい文学的迫力は圧巻である。「怒れる神」は、まだ回心していない罪人を地獄の上に細い糸で吊り下げておられ、下には地獄が炎をあげて呑み込もうと待っている。「この瞬間、あなた方が永遠なる破滅へと呑み込まれないのは、ひたすら神のご意向による」のであり、その時がいつかを決めるのは神意であるという説教は、その当時の会衆者だけでなく、それ以後も人々の墮落への恐怖を心に焼き付ける役割を果たした。

カルヴァン主義を継承するエドワーズ神学は、アメリカの独立以降、19世紀に入って新しい時代精神の息吹とともに、リベラルな神学へと塗り替えられていく。そうしたなかでも、一貫して「プロヴィデンス」は基軸概念であったが、その解釈には時代による変遷がみられるといえよう。ジョン・カルヴァンは、神の主権を最も強調したが、「神の主権をさらに強調するためには、すべての事柄が神によって予定されているということ……神が全能であるだけでなく、……神はまた『み旨の欲するままに、すべての事をなさる』（エペソ1・11）方である。」<sup>4</sup>と説いた。David D. Hallも、その著で、カルヴァンが、『キリスト教要綱』のなかで、プロヴィデンスを特筆大書したため、神のプロヴィデンスの教義が、16世紀にあらたな重要性をもつようになった、と述べている。そのことにより、世界で起こることは何一つ偶然性あるいは全くの運（“blind chance”）によるものではないと信じられた<sup>5</sup>。こうした考えは、やがてアメリカのニューイングラ

---

4 エドウィン・パーカー 『カルヴィニズムの五特質』 つのぶえ社 2008年 150.

5 David D. Hall *Worlds of Wonder, Days of Judgment: Popular Religious Belief in Early New England*. Cambridge: Harvard UP, 1990. 77-78. Hallの研究は、初期ニューイングランドで、日記や書物の形で、人々が日々の出来事のなかにプロヴィデンスを注意深く見出し、記録していった様子を辿ったものである。

ンドにも伝承されていった。

プロヴィデンス解釈の通俗化による歪曲が起こるようになったのは、19世紀になってからである。マーク・トウェインは、イエール大学教授陣によって1819年に創刊された *The Christian Spectator* 誌を指して、「プロヴィデンス物語で読者を誤った方向に導くひどい道徳的偽善者」であると評したという<sup>6</sup>。ここで、「プロヴィデンス物語」というジャンルが人々の関心を引くものとして確立していたことがわかる。端的にいえば、プロヴィデンスを人々が曲解していくなかで、善人は、いつも保護され報いを与えられるのに対して、悪者は、いつも贖われるか罰せられるかのどちらか、という勧善懲悪の定型が信じられるようになったことを意味する。またそれと同時に、“special providence” という言葉も好んで用いられるようになった。マーク・トウェインは、いくつかの作品<sup>7</sup>のなかで、作中人物にその言葉を使わせているが、1886年の「ノートブック」には、“Special providence! That phrase nauseates me—with its implied importance of mankind & triviality of God” と憤懣を記している。ここには、マーク・トウェインの神観および人間観が明白に表れており、注目に値する。神の主権が、相対的に矮小化し、人間がプロヴィデンスを自己本位に解釈する度合を広げている時代風潮を批判したものといえるであろう。

## II.

マーク・トウェイン文学を代表する傑作のひとつ、「ジム・スマイリーと跳び蛙」は、1865年11月18日、ニューヨーク『サタデー・プレス』には

6 Joe B. Fulton *The Reverend Mark Twain: Theological Burlesque, Form, and Content*. Columbus: The Ohio State UP, 2006. 44.

7 本論中考察する作品のほかに、*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1894年)の11章で、トムの母親のロクシーが、盗みに入るのに絶好の機会が到来したことを息子に知らせる際に、その言葉を使う。

じめて掲載され、1867年、*The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County and Other Sketches* に収録された。この作品は、「マーク・トウェイン」というペンネームをニューヨーク、東部、そして全米へと知らしめることになったほど、驚異的な反響を呼んだ。その魅力は、語り手のサイモン・ウィーラーの語り口にあったといえる。マーク・トウェインは、1864年5月29日にネバダを離れ、サンフランシスコに行き、さらに、1865年1月22日から2月20日までエンジェルズ・キャンプに滞在し、その間、ベン・クーンという人物の語る「跳び蛙の話」を聞き、魅了され、その話の要点を「ノートブック」に記している。「跳び蛙をもっているコールマン (Coleman) —よそ者と50ドル賭ける—よそ者は蛙をもっていなかった、それでCが彼のために蛙を手に入れた—その間によそ者はCの蛙に散弾をいっぱい詰め込んだ、そして、蛙は跳べなかった—よそ者の蛙が勝った。」この骨格から、ベン・クーンのみじめくさった口調をうつしたサイモン・ウィーラーという語り手が語る、賭け事しか頭にない、ゴールド・ラッシュ時代を生きるジム・スマイリーという人物をマーク・トウェインは創造した。加えて、生き生きとした興味をそそるのは、蛙だけではなく、個性あふれる動物たちが登場することによる。病気もちの老いぼれ牝馬、アンドルー・ジャクソンという第7代大統領と同じ名前をもつしぶといブルドッグの子犬、そして、蛙の名前は、ダニエル・ウェブスターである。歴史上のウェブスター (1782-1852) は、下院議員、上院議員、国務長官を歴任し、雄弁家としても知られた政治家である。

前段でみたように、「ジム・スマイリーと跳び蛙」は、さまざまな動物たちを使って、賭けをしていくスマイリーのエピソードを物語っていく作品であるが、注目すべきは、動物たちと並んで、「ウォーカー牧師」を使ってスマイリーが賭けをしている点であり、また、「ウォーカー牧師」を相手に賭けをする点である。スマイリーは、犬の喧嘩、猫の喧嘩、鶏の喧嘩

があれば、必ず賭けをし、フェンスにとまっている二羽の鳥がいれば、どっちが先に飛び立つかに賭けをするだろう、という言葉に続けて、サイモン・ウィーラーは、「もし野外の伝道集会があれば、スマイリーはそこに決まって姿を現し、この辺りでは一番うまい説教者だと思っているウォーカー牧師に賭けるだろう」と説明する。

「何であれ」賭け事にする、という意味で「とびきりの男」と称されたスマイリーの面目が躍如となるのは、ウォーカー牧師と言葉をかわす場面である。ウィーラーは語る。「以前、ウォーカー牧師の奥さんが、とても助からないように思えるほど重病になったことがあった。ある朝、スマイリーが、ウォーカー牧師のところにやってきて、奥さんの具合をたずねると、牧師は、『ずいぶん良くなっており、主の限りない御恵みに感謝しています。とても早く良くなっているので、プロヴィデンスの恩恵により妻はもっと回復するでしょう。』と答えた。すると即座に、スマイリーは言った。『それじゃ、奥さんはとにかく良くならないと2ドル半賭ける。』それまではすべて“bet”が使われていたのに、同じ「賭ける」という意味であるが、スマイリーの反射的に口にした言葉に“risk”が使われていることが注意を引く。牧師の感謝と祈りをこめた言葉であるプロヴィデンスを相手に、リスクに賭けるスマイリーの性格がここにあらわれている。

*The Innocents Abroad, or The New Pilgrim's Progress* (1869年)と題するヨーロッパ・聖地巡礼の旅記に次いで、1872年に出版されたのが *Roughing It* である。この書もおなじく旅行記であるが、前作と異なり、故郷のミズリー州から出発し、アメリカの極西部への旅を記した62章までが主要部分を成しており、それに加えて、サンフランシスコを出てサンドウィッチ諸島への旅が記される78章までと故郷に戻る79章という構成になっている。この旅行記は、ほぼ自伝的な回想記ともいえるものであり、換言すれば、マーク・トウェインの「物語」発見の文学的な旅を記したも

のであると解釈できる。その代表的な例として、53章の「爺さんの老いた雄羊の話」が挙げられる。これは、*Roughing It* から独立した形で、マーク・トウェインの短篇作品集に必ず収められる作品である。その物語形式は、フロンティア・ヒューモアの代表格のひとつ“yarn”であり、その見事な典型となっているからである。

「跳び蛙の話」では、プロヴィデンスを口にするのは牧師であるが、この作品では、この「爺さんの老いた雄羊の話」を語るネバダの鉱夫ジム・ブレインが、鉱夫仲間たちに向かってプロヴィデンスについて説教する。「あんなすばらしい雄羊はいなかった。爺さんがイリノイから連れてきて—イエーツという名の男から手に入れたものだが—ビリー・イエーツ—その男のうわさを聞いたことがあるかもしれない、その父親は教会の執事で—洗礼派だ—……」と話し始める。次々と名前が紡ぎだされ、名前の連鎖以外に関連のないグロテスクな話がとめどなく語られていく。だが、注意してみると、そうした名前のなかに、このビリー・イエーツの父親のほか、二人の「教会の執事」、ファーガソンとダンラップ、ハガー牧師、そして、経帷子を着たロビンスが棺桶のふたをはねのけ、葬式を中止するよう頼んだ牧師、そして、野蛮人に食べられた宣教師、というように、教会関係の登場人物が目立つ。宣教師を話題にしたところで、ジム・ブレインは、「プロヴィデンスは、空弾包を発砲することはない。」と、一同の者に言い聞かせる。つまりは、バーベキューにして宣教師を食べたことによって、野蛮人の異教徒は、一人残らず回心したことになり、それを偶然というべきではない、と言い切る。

プロヴィデンスを信じることと、ジム・ブレインの説く「偶然というものはない。」という考えは、神学上ひとつのことであり、間違っていない。だが、引き合いに出す例は、宣教師の例と同様、グロテスクな死をイメージさせる。ジム・ブレインのレム叔父が、かつて建築現場の足場に寄りか

かっていた時、煉瓦をたくさん入れた箱をもったアイルランド人が、3階から落ちてきて、叔父の背骨を2か所折った。「人は、それは偶然だといった。」しかし、「叔父がそこにいなかったら、アイルランド人が死んでいただろう。」また、叔父の犬もそこにいたが、なぜアイルランド人は犬の上に落ちなかったかといえ、犬は落ちてくる姿を見たら身をおかわすだろうから、「特別なプロヴィデンス」を果たすには犬は頼みにならないからだ、とジム・ブレインは解釈する。偶然とみえる出来事でも、必ず何かの目的があるので、「偶然というものは起こらない」と、仲間たちに重ねて強調する。「爺さんの老いた雄羊の話」は、一見脈絡がないように見えて、大衆化したキリスト教的メッセージを強く打ち出した話であることがわかるのである。

### Ⅲ.

つぎに検討する作品は、マーク・トウェイン文学の最高峰 *Adventures of Huckleberry Finn* である。「プロヴィデンス」を軸に、語り手のハックルベリー・フィン、ハック・フィンにキリスト教教育をほどこすミス・ワトソンとダグラス未亡人という二人の女性、それぞれの性格描写を見ていきたい。まずなにより興味深いのは、3章のところで、ハックの目から見た、ミス・ワトソンとダグラス未亡人とのプロヴィデンス観の違いが浮き彫りにされる箇所である。そして、作品構成上クライマックスをなす31章とつぎの32章で、ハック・フィンがどのような文脈でプロヴィデンスという言葉を使い、また、そのことがどのような意味をもつかを考察する。

作品の冒頭、“You don’t know me, without you have read a book by the name of *The Adventures of Tom Sawyer*, …” と、読者の耳にじかに響いてくる口調で始まる。『トム・ソーヤーの冒険』の終わりで、ダグラス未亡人の養子になった浮浪児ハックは、元の気ままな生活に戻っていったが、

トムの勧めで再び未亡人のところに帰る。1章はそこから語り出される。*The Adventures of Tom Sawyer* では、三人称形式で物語が進行していったのに対し、この作品には、語り手のその時々心がそのまま映し出される面白さがある。「迷える子羊」といってハックを大喜びで迎えた未亡人の言葉は、ハックには通じない。未亡人に悪意があってそう呼んだわけではないとしかわからないハックは、未亡人からさっそく「モーゼと葦」の話を教わっても、モーゼがずいぶん昔に死んだとわかって、すぐに興味を失ってしまう。ハックの躰け係が、ミス・ワトソンという未亡人の妹である。口うるさく行儀を注意しても治らないため、「悪い場所」についてワトソンは教えるが、それを聞いたハックはそこに行ってみたくと言って、ワトソンの怒りをかう。なぜなら、ミス・ワトソンは、「良い場所」に行くために暮らしているのであって、ハックのような不埒な発言を口にすることは不道徳なのである。そして、ミス・ワトソンは「良い場所」とは、「永遠に一日中ハーブをもって歩き回り、歌っていればいい所」であると説明するが、これは、「天国」の型にはまったイメージといってよい。そこでハックが、トム・ソーヤーはそこに行くだろうかと尋ねると、ミス・ワトソンは、それはあり得ないと答える。ハックは、ミス・ワトソンの行く「良い場所」よりも、「悪い場所」でトム・ソーヤーといっしょにいる方がよいと内心思う。

そして、3章では、ミス・ワトソンが、ハックに、毎日お祈りをするようにといい、何でも求めるものは、得られると教える。ハックは実行してみるが、願ったものは得られない。自分かわりに祈ってほしいとミス・ワトソンに頼むと、「愚か者」だと言われてしまう。その理由をまったく説明してもらえず、ハックは理解できないまま、ひとり森に入り、じっくり考えてみる。祈りと報酬との関係という問題に突き当たったハックの頭には、身の回りに起こった実際の例が浮かんでくる。教会執事のウィンさ

んは、どうして豚肉で損をしたお金を取り戻せないのか。どうして未亡人は、盗まれた銀の嗅ぎタバコ入れを取り戻せないのか。お祈りの効き目というものはないのか、自問する。それから、未亡人に祈りについて聞いてみる。お祈りによって得られるものは、‘spiritual gifts’であると答えた後、その意味は、ハックが「ほかの人たちを助け、ほかの人たちのために出来ることをすべて行い、いつもその人たちのために気をつけ、けっして自分自身のことを考えてはいけない。」ということであると説明してくれる。そこでまた、ハックは森に行き、心のなかで時間をかけてその説明をあれこれ考えてみるが、それには有利なことはまったくないと思い、そのまま放念する。そのようなことがあってか、未亡人は、ハックに、「人によだれを垂れさせるように、プロヴィデンスについてよく話してくれる」が、そのつぎの日には、ミス・ワトソンが「またその話をたたきつぶしてしまう。」ハックは、「ふたつのプロヴィデンスがあることがわかった。」といい、その違いは、「哀れな奴でも、未亡人の方のプロヴィデンスならかなり望みがあるけれど、もしミス・ワトソンの方のプロヴィデンスが奴をつかまえたら、それっきり助からないだろう。」ということだと考える。ハックは考え抜いたすえ、「ひどく無知で、卑しくて、みすばらしい」自分を見て、プロヴィデンスの方でほしいというなら、未亡人の方のプロヴィデンスのものになろうと思う。

こうして1章と3章を合わせて見てみると、ミス・ワトソンは、プロヴィデンスに利己的な願望実現を期待し、他方、未亡人は、プロヴィデンスが利他的な道徳的価値を与えてくれるものと期待している、と捉えることができる。日曜学校にも行っていないハックは、この段階まで神学的なプロヴィデンスについて教えられたことはなく、ふたりの女性から聞くそれぞれが抱いているプロヴィデンス観に触れたにすぎない。

*Adventures of Huckleberry Finn* 論に関する研究は、数多く発表されてい

るが、この「ふたつのプロヴィデンス」に注目して論考している希少な論文が、“The Two Providences: Thematic Form in “Huckleberry Finn””である。その論者 Edgar M. Branch は、ふたつの選択肢のうち未亡人の方のプロヴィデンスを選んだことから、その後のハックの行動は、そのプロヴィデンスに向かってよろめきながらも進んでいく形をとり、人を助けなければならないという未亡人のプロヴィデンスの意味は、逃亡奴隷ジムとの運命を共にする中で深まっていくと解釈する。プロヴィデンスのハックの道徳面への働きかけを重視する論であろう。

だが、作品の重要な分岐点となる31章と32章をあらためて検討し、「ふたつのプロヴィデンス」ではない「ハックのプロヴィデンス」について考察していく必要がある。逃亡奴隷のジムが、ふたりの役に闖入してきた「王様」と「公爵」によって勝手に40ドルで奴隷として売り渡されたことを知ったハックが、試練に立たされるのが31章である。ジムは、一生見知らぬ土地で奴隷となるのがよいのか、あるいは家族のいる土地に戻るのがいいのか、ハックは考える。もしミス・ワトソンにジムの居所を知らせれば、ジムをやはり別なところに売り飛ばすかもしれない。また、ジムが自由な身になるために手を貸したハックは、町の人々から辱めをうけるかもしれない。このふたつの考えにハックの「良心」はひどく苦しめられる。まさに板挟みになって身動きが取れない状態になったとき、“when it hit me all of a sudden that here was the plain hand of Providence slapping me in the face and letting me know my wickedness was being watched all the time from up there in heaven,…”<sup>8</sup> それまで経験したことのない衝撃的な啓示といえよう。自分に危害を加えたことのなかった気の毒な老女から奴隷を盗み出している恥ずべき行為をずっとご覧になっておられ、この瞬間に神の怒りは下されたたとハックは恐れたのである。ジョナサン・エドワーズの説

8 *The Adventures of Huckleberry Finn*. Baltimore: Penguin Books, 1971. 207.

教を想起させる言葉、「地獄の炎に焼かれる」とまで思いつめるほど、ハックは神の面前に引きだされた罪人の恐怖を経験する。ここで初めてハックは、必死の思いで祈ろうとする。だが、祈りの言葉は口から出てこない。自分の本心を隠して、嘘を祈ることはできないと悟るが、これは、ハックは全能の神がすべてを見通されていると信じていることを示すものである。ハックは、まず良心の命ずるところに従い、持ち主にジムの居所を知らせる手紙を書く。すると、「罪」がさっぱりと洗い流された気分になって、ハックには、今度は祈ることができると分かった。しかし、ハックはすぐにそれをせず、しばらく思いにふける。ジムとのミシシッピ川での旅のいろいろな場面が鮮やかに蘇ってくると同時に、ジムが、ハックは世界で最高のたったひとりの味方だと語った言葉を思い出したとき、手紙が目に入る。ハックは、このとき本当の決断を迫られたのである。そして、この作品のなかで最も有名な言葉、‘All right, then, I’ll go to hell’を自分に言い聞かせ、ハックは手紙を破る。このとき、ハックは、地獄行きと引き換えに、奴隷制度に基づく社会道徳の重圧をはねのけたのである。

次の32章では、ハックはジムを救出するため、ジムが売られたフェルブス農場に急いでむかう。その小さな綿花農場に入っていく、それから台所に近づいて行くときの気持ちをこう語る。“I went right along, not fixing up any particular plan, but just trusting to Providence to put the right words in my mouth when the time come; for I’d noticed that Providence always did put the right words in my mouth, if I left it alone.”<sup>9</sup>ここでハックがいうプロヴィデンスは、明らかにミス・ワトソンのプロヴィデンスでもなく、また未亡人のプロヴィデンスでもない。自分の思いや計画から未知の事態に対処するのではなく、必要な時に必要な言葉を語らせてくださるプロヴィデンスへの信頼を語っているのである。3章のときのハックは、いくら考

---

9 *Ibid.* 213.

えても理解できなかったプロヴィデンスであったが、ここまでの経験を通して、自分にはプロヴィデンスが働いておられることに気付いてきている。さらに、この同じ章で、読者は、ハックのプロヴィデンスについて再度知ることになる。フェルプス農場の人々は、じつはトム・ソーヤーが訪れてくるのを心待ちにしていたので、ハックのことをそうとは知らずに大歓迎する。だが、ハックには、自分が誰と間違われているのか見当もつかないので、サリーおばさんからしきりと身内の話をしてほしいと頼まれ、困り果てる。ハックは何も話せなくて途方にくれ、“Providence had stood by me this fur, all right, but I was hard and tight aground, now.”<sup>10</sup>と、いまこそ窮地と思うが、どうにもならず、自分のことを打ち明けるしかないとき、サイラスおじさんが家に帰ってくる。すぐにサリーおばさんは、おじさんを驚かせるために、ハックをベッドの後ろに隠す。二人の会話を聞いていたハックの耳に、「トム・ソーヤー」という名前が入ってきて、はじめて自分が誰と間違われているのかはっきりわかる。ハックが大喜びをしたことはいままでのない。トム・ソーヤーの家族の話なら、いくらでも話すことができたからである。ジム救出を目的にやってきたハックが、それを果たさずに困った状況に陥ったとき、ハックにはその先がどのように展開するか予想もつかなかったが、このときもさきほど見たように、ハックは苦境を脱し、プロヴィデンスへの信頼はさらに確かなものになったといえるであろう。

33章以降でトム・ソーヤーが登場し、ハックの思いとは別に、ジム救出劇をヨーロッパの囚人脱出物語にならった筋書きにして、最終章までトムの主導でストーリーが展開していく。これまで多くの研究者・批評家は、「ジムが盗まれた時が作品の本当の終わりであって、そこで読むのをやめるべきだ。」というアーネスト・ヘミングウェイの有名な言葉も含めて、

---

10 *Ibid.* 216.

その部分の不要論を議論してきた。あらためて、「プロヴィデンス」を鍵に作品を見た場合、ハック・フィンとトム・ソーヤーとの対照は、きわめて明白になるのである。トムは、物語の世界に行動の基準があり、自分がヒーローとなる筋書きを作ることに熱心であるが、物語世界と現実世界との間の区別を知らない。一方、ハックは、『トム・ソーヤーの冒険』の世界から抜け出て、現実の世界はまったく予測のつかない事態の連続であり、自力では脱することのできないさまざまな窮地を経験した。そうした深刻な経験を通して、次第にプロヴィデンスへの信頼をみずから培っていったと考えられる。ハックルベリー・フィンを陸地での逃亡ではなく、ミシシッピ川の旅に送り出したのは、プロヴィデンスであったともいえるであろう。

#### IV.

マーク・トウェイン文学という場合、マーク・トウェインの生前に出版された作品だけでなく、近年は、遺された膨大な未発表の原稿を保管している Mark Twain Papers（カリフォルニア大学バークレー校）によって編集され、刊行されている作品をも含む。そのような作品の中から、プロヴィデンスとの関連でふたつ取り上げよう。ひとつは、“The Refuge of the Derelicts”（1905年から1906年にかけて執筆された未完の小説）であり、もう一つは、“Letters from the Earth”（1909年）である。

“The Refuge of the Derelicts”は、アダムの記念碑を建てるため出資者を探している詩人のジョージとその友人のデイヴィッド・シップマンとの会話で1章が始まり、2章でジョージが出資を依頼するため面会を求めた提督との会話とその主な内容となる。3章から13章まではジョージの日記という構成になっている。プロヴィデンスが使われているのは、2章において、提督に面会した後、ジョージとデイヴィッドが提督について語り合

う箇所である。提督の若き日の1回の失敗が、いま提督が自分の家を「浮浪者の停泊所」としていることにつながっていると、デイヴィッドが説明したことに感動して、ジョージは、つぎのようにいう。“… that incident of the long ago was not an accident, it was *meant*, and it had a purpose. The hand of Providence was in it—I know, I see it.”<sup>11</sup> それに応じて、デイヴィッドも、同感の気持ちを表す。“… there are no accidents, all things have a deep and calculated purpose; sometimes the methods employed by Providence seem strange and incongruous, but we have only to be patient and wait for the result: then we recognized that no others would have answered the purpose, and we are rebuked and humbled.”<sup>12</sup>

つぎは、6章のジョージの日記で、提督の「浮浪者の停泊所」で知った元黒人奴隷のフィリスと黒人のラスタスは、いつも親友でありながら、宗教上の論争となると別で、メソヂスト派のフィリスが“special providences”を信じるというのに対し、ラスタスは、それを否定することが記されている。そして、11章のジョージの日記では、主にこのふたりの議論がその内容である。30年前に、ラスタスはニューイングランドの州にある農場で雇われ、その農場主の料理人だったフィリスと出会って、すぐに“special providences”の問題を議論し始め、それ以来議論を続けているという。このふたりの議論をこまかく記していることから、ジョージもそのことに強い関心を抱いていることは明らかである。この小説は未完であるが、マーク・トウェインのプロヴィデンスに対する関心の高さを示す作品といえる。

最晩年に執筆された“Letters from the Earth”は、サタンの書簡という

---

11 John S. Tuckey *The Devil's Race-Track: Mark Twain's Great Dark Writings*. Berkeley: U of California P, 1980. 309.

12 *Ibid.*

独創的な形式をとっている。大天使サタンが、「節操のない発言を度々して」創造主から罰として宇宙空間に追放された後、仲間の大天使ガブリエルとミカエルに地球事情を知らせる手紙を書き送るという構成で、11の手紙から成る。4通目から9通目までは、ノアとその家族の箱舟の旅が語られる。しかし、神とノアとの新しい契約の物語ではなく、創世記の記事にはない動物たちの個々の行動にサタンの関心は向けられているのである。そのなかの6通目では、箱舟に乗った動物たちから取り残された「ハエ」について、サタンが語るのであるが、そこにプロヴィデンスが使われている。まず、3日目に「ハエ」が後に残されたことがわかり、16日間の真剣で忠実な搜索の結果、ついに「ハエ」が発見され、賞賛と感謝の讃美歌で船に迎えられた、とサタンは報告する。サタンはつぎのようにその出来事を語るのである。“Providentially. That is the word. For the fly had not been left behind by accident. No, the hand of Providence was in it. There are no accidents. All things that happen, happen for a purpose. They are foreseen from the beginning of time, they are ordained from the beginning of time.”<sup>13</sup>このサタンの言葉は、あのジム・ブレインが鉱山町のヴァージニア・シティで語っていた言葉と同じであるところが、じつに興味深い。

マーク・トウェインは、ハレー彗星が地球に大接近した1835年11月10日から20日後の11月30日、ミズリー州フロリダで生まれた。マーク・トウェインの死後、アルバート・ペインが、つぎのようなマーク・トウェインの言葉を伝えている。「わたしは、1835年にハレー彗星とともにやってきました。ハレー彗星は、来年またやってきます。それで、わたしは、それとともに去ることを期待しています。もし、ハレー彗星といっしょに出て行かないのなら、私の人生で最大の失望となることでしょう。全能の神はこ

13 Bernard DeVoto *Letters from the Earth*. New York: Harper & Row, 1962. 30.

う言いました、間違いなく。『さあ、ここに説明のできないふたりの奇妙な変わり者がいる。ふたりはいっしょに来た。いっしょに出て行かなければならない。』ハレー彗星の周期は、ハレーの研究によって76年とされているが、1910年4月20日ハレー彗星が大空に出現し、その翌日の4月21日、マーク・トウェインは、ハレー彗星とともに世を去った。マーク・トウェインは、たしかにプロヴィデンスを信頼していたにちがいない。

### 〔引用文献〕

- Branch, Edgar M. "The Two Providences: Thematic Form in "Huckleberry Finn." "*College English* Vol.11, No.4 (Jan. 1950):188-195.
- DeVoto, Bernard. *Letters from the Earth*. New York: Harper & Row, 1962.
- Fulton, Joe B. *The Reverend Mark Twain: Theological Burlesque, Form, and Content*. Columbus: The Ohio State UP, 2006.
- Hall, David D. *Worlds of Wonder, Days of Judgment: Popular Religious Belief in Early New England*. Cambridge: Harvard UP, 1990.
- Hartman, James D. *Providence Tales and the Birth of American Literature*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1999.
- Suderman, Elmer F. "Popular American Fiction (1870-1900) Looks at the Attributes of God." *Journal of Popular Culture* 4:2 (Fall, 1970): 383-397.
- Kaplan, Justin. *Great Short Works of Mark Twain*. New York: Harper & Row. 1967.
- Tuckey, John S. *The Devil's Race-Track: Mark Twain's Great Dark Writings*. Berkeley: U of California P, 1980.
- Twain, Mark. *The Adventures of Huckleberry Finn*. Baltimore: Penguin Books, 1971.
- . *The Adventures of Tom Sawyer*. New York: W.W. Norton & Company. 2007
- . *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. New York: W.W. Norton, 1980.
- . *Roughing It*. Berkeley: U of California P, 1993.
- 朝日由紀子 「マーク・トウェインの天国建設の旅」 『白百合女子大学研究紀要』 第44号 平成20年。
- ナイジェル・コールドー 『ハレー彗星がやってくる!』 岩波書店 1985年。
- パーカー、エドウィン 『カルヴィニズムの五特質』 つのぶえ社 2008年。